

# 総合学科のこれまでとこれから

## —熊本県立翔陽高等学校総合学科の実践から—

益 田 亮 英

### 1 はじめに

総合学科高校は平成6年度全国で7校からスタートした、その後設置校は徐々に増加し、平成20年度までに334校となった。設置数は増加しつつあるものの、その伸び率は平成17年度からは5～6%と落ち、特に平成19年から20年には3%になっている。総合学科設置当初、文部科学省は「総合学科を設置する公立高等学校が高等学校の通学範囲に少なくとも1校整備されることを目標としています<sup>1)</sup>。」と示している。通学区に最低1校は設置し全ての生徒が選択できることを目指した文部科学省の目標からすると実現まではほど遠い。

特に熊本県においては、平成8年度に翔陽高等学校に設置されて以来公立高校に総合学科の設置はなされていない。高校再編計画が提言されて、幾つか総合学科の新設が取りざたされているが実施のめどは立っていない。このような時期にあって、総合学科として翔陽高校がどのような歩みをしてきたか、その実践を検証しながら学校経営的な視点から総合学科の今後について考えたい。

### 2 生徒・職員の実態

翔陽高校の前身大津産業高校は1学年6学科7クラスの専門高校であった。専門高校時と比較したとき総合学科では生徒の実態はどのように変化したか、男女の割合や出身地域別の生徒数の変化を見る。(表1、表2) 専門高校時は工業系3学科3クラス、農業系2学科2クラス、家庭系学科2クラスと男子系の学科が多かったために約70%が男子生徒であった。総合学科になって商業系列や普通系列が加わったこともあって女子生徒の割合が多くなった。平成15年度は女子が46%近くを占めることになった、現在のところ男女比は6:4で落ち着いている。(グラフ1) 専門高校時も総合学科でも募集定員は1学年7クラス280名で変わっていない。

また、出身地域別の生徒数を見ると専門高校時に大津町を含む菊池郡市の出身者が60%を越えていたものが総合学科になってその割合を下げている。特に地元大津町の出身者の割合がここ数年徐々に減少し、平成6年度23.0%あったものが、平成20年度には14.0%にまで低下した。翔陽高校原田教諭の大津町教育講演会資料(平成19年)によると地元の大津高校、翔陽高校に進学している生徒は大津中学校、大津北中学校の卒業生の40%に過ぎない。

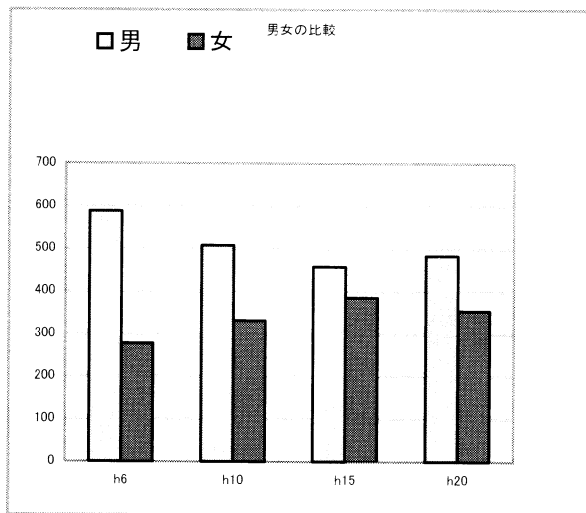
熊本市内には公私立を含め多くの校種の高校が数多くある上に、少子化社会となって高校入学が比較的容易になったこと。更に大津町は熊本市への通学圏内にあり、JRが電化されるなど交通の便が整備され通学が容易にできるようになったこと。また、入試改革によって普通高校への

学区外からの受入れ枠が拡大されたことなどが考えられる。総合学科創設時に地元中学校から懸念された、「翔陽高校に生徒が全県下から集まるようになれば入試の難易度が高まり、地元の生徒がはじき出される事になるのではないか。」ということなど、さまざまな要因が考えられる。

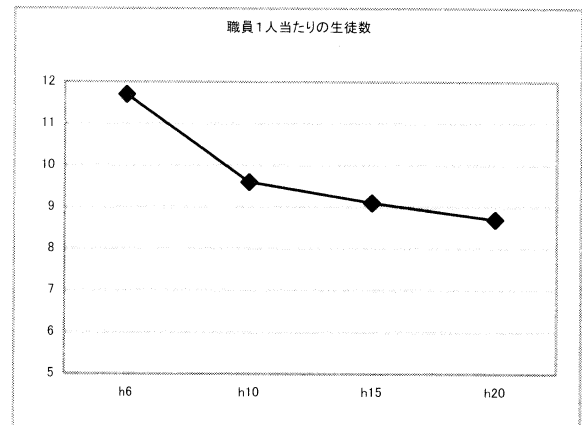
総合学科の運営には、第一の特色である科目選択制に対応するために、施設設備の拡充はもとより職員も増やして対応しなければならない。平成6年度の学科制のときと比べると総合学科になって教諭が10%の増、特に常勤、非常勤講師が極端に増えている。これは多くの科目を開講するためには非常勤などによって対応せざるを得ないためである。単純に職員数で生徒数を割ってみると、平成6年度11.8であったものが平成20年度には8.8と、先生一人当たりの生徒の数が少なくなっている。(グラフ2) 特に、平成14年度から教頭二人制、平成16年度からは養護教諭の二人制が導入されるなど職員配置は充実している。(表3)

表1 男女別生徒数

	平成6年度	平成10年度	平成15年度	平成20年度
男	588 (67.9)	508 (60.5)	458 (54.3)	484 (57.8)
女	278 (32.1)	331 (39.5)	386 (45.7)	354 (42.2)



【グラフ1 生徒数男女の比較】



【グラフ2 職員一人当たりの生徒数】

表2 出身地域別生徒数

	平成6年度	平成10年度	平成15年度	平成20年度
大津町	199 (23.5)	152 (18.1)	134 (15.9)	117 (14.0)
菊池郡市 (大津町を除く)	318 (37.5)	271 (32.3)	304 (36.0)	334 (39.9)
阿 蘇	94 (11.1)	128 (15.3)	132 (15.6)	134 (16.0)
熊 本	225 (26.5)	260 (31.0)	243 (28.8)	244 (29.1)
その他	12 (1.4)	28 (3.3)	31 (3.7)	9 (1.1)

表3 職員構成

人

	平成6年度	平成10年度	平成15年度	平成20年度
校長	1	1	1	1
教頭	1	1	2	2
事務長	1	1	1	1
教諭	50	54	55	55
常勤講師	1	8	9	8
非常勤講師	2	6	10	12
実習助手	10	8	7	8
養護教諭	1	1	1	2
技師	3	3	3	3
事務	4	4	4	4

### 3 教育課程と実践

#### (1) 設置科目数

翔陽高校が設置している教科科目について、総合学科の完成年度から今日までどのように変わったかを教育課程表から見たい。(表4)

表4 設置科目数

		系列数	平成10年度	平成15年度	平成20年度
普通教科		1	51	49	48
専門教科	家庭	1	15	14	12
	農業	2	17	17	15
	工業	3	26	21	22
	商業	1	15	12	12
その他			3	3	2
合計		8	127	116	111

(その他の欄は「産業社会と人間」と「特活」)

総合学科の完成年度(平成10年度)の科目数は127科目で、学習指導要領の示す科目の中から、系列に沿った科目をほぼ100%近く網羅していたが、その後、選択者数、教員数、教室などのハード面から対応には限度があるため、生徒の進路の実現に応えられる範囲で科目の精選を行った。平成20年度には設置科目数は減少しているものの110科目を超えている。総合学科に移行する前の専門高校時の科目数は74(普通22科目、家庭14科目、農業14科目、工業24科目)であるから1.5倍近い科目数となっている。

## (2) 授業形態（開講科目と受講者数など）

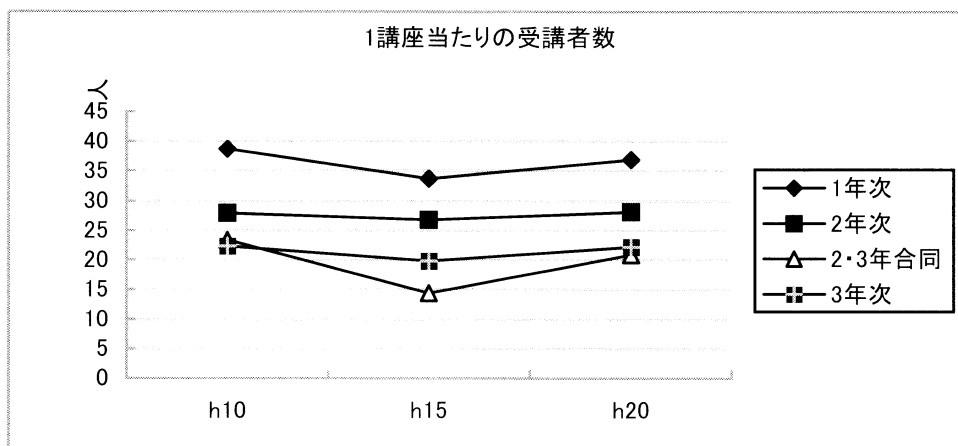
次に多くの設置科目の中から、生徒が選択し、実際にどのような科目が開講され、どんな形で授業が展開されているか見たい。（表5）

表5 開講科目数と受講者数

	平成10年度			平成15年度			平成20年度		
	科目数 (科目)	講座数 (講座)	1講座 当たり (人)	科目数 (科目)	講座数 (講座)	1講座 当たり (人)	科目数 (科目)	講座数 (講座)	1講座 当たり (人)
1年次	21	96	38.7	20	93	33.7	20	92	36.9
2年次	54	130	27.9	39	110	26.8	47	122	28.1
2・3 年合同	17	18	23.4	17	57	14.4	12	17	20.9
3年次	80	138	22.3	70	116	19.8	78	149	22.2

1年次は理科、芸術、総合選択科目を除いたほかは、クラス別授業を原則としているために、クラスの定員40名に近い数の人数で授業が展開されている。開講科目数の変動は、生徒の選択の状況によって毎年変わることであり、仕方のないことであるが、2年生においては1講座当たりの受講者が30名以下に保たれている。3年次生については、20名前後の人数で授業が展開されており、生徒のニーズにあった授業が行われている。（グラフ3）

グラフ3



異学年混成授業は生徒の学習希望にできるだけ応えるために、学習にグレードを伴わないような科目については2、3年次生を一緒にして学習集団を作っている。ただし、異学年を混成することが目的ではないので展開可能な限りにおいて単独の学年のみで学習集団が構成されるよう努めている。また必修科目であって1年次に履修できなかったものが2年3年次になった1年次の教室に入って履修する場合もある。

少人数授業の展開には、習熟度による集団分けがあるが、翔陽高校の場合は科目選択制による

集団分けの形をとっている。両方にそれぞれの特徴があるが、習熟度別集団には学力差によるところが強いため劣等感を抱く集団が発生することは避けられない。その点科目選択制の場合、自分の意思で学習集団に参加したという意識が強く満足度も高い。

教育課程表によると、設置科目数は総合学科完成年度の平成10年度の127科目に比べて、平成20年度は111科目と減少しているが、展開されている講座数は3年生では、138から149と増えており、平均受講者も22.2人と変わっていない。このことは、科目選択についてのガイダンスが充実してきた結果興味本位の科目選択から、体系的、系統的な科目選択へと生徒の姿勢の変化が現れたものと見られる。

### (3) 「課題研究」から「総合的な学習」

総合学科の設立時においては、「産業社会と人間」、「情報に関する科目」、「課題研究」が原則履修科目<sup>2</sup>として指定されていたが、現行の学習指導要領から学科設定科目は「産業社会と人間」だけになった。そのために、「課題研究」が各専門教科の科目から消えて「総合的な学習」となった。

学習指導要領に、「総合学科においては、生徒が興味・関心、進路に応じて設定した課題について、知識や技能の深化、総合化を図る学習活動を含むこと<sup>3</sup>。」となっている。「課題研究」では専門学科のそれと同じく、選択によって学習した内容（系列の専門的内容）を更に深化させて取り組むという観点から教科をそれぞれの専門学科に位置づけ、教科ごとに「課題研究」を設けていた。学習指導要領の改訂によって「課題研究」は「総合的な学習」に変わった。「総合的な学習」に変わったことにより、専門科目でなくなり免許教科に関係なく誰でも担当できるようになった。このことは、教育課程の展開がより容易になった反面、選択して学習した内容を深める従来の「課題研究」と同様の学習をやっているにもかかわらず専門科目の履修単位としてカウントすることができなくなったというマイナス面も生じている。

### (4) 前期終了での卒業認定

翔陽高校の教育課程運用上の特徴的なものは、単位制の特徴を生かした4年次以上の生徒を対象にした前期終了時での卒業認定があげられる。

3年間で卒業に必要な単位数に足りなかった場合、4年次以降の生徒に対して、前期終了時点で単位認定を行い単位の修得を認め、卒業を認定している。この制度によってこれまでに数名の生徒が前期終了で卒業している。単位の修得に関しては技能審査の結果を基に関連科目の増加単位を認めるだけでなく、インターンシップやデュアルシステムなどの体験も単位として認定する<sup>4</sup>など弾力的な教育課程の運用が行われている。

## 4 受験者数の推移

総合学科は中学生の人気は高く、常に入学倍率は高い。平成17年度から入試制度が変わり、比較が困難になっているが、平成16年度までの一般入試の競争率は大変高い。(表6) 平成16年2月24日の熊本日日新聞記事によると1.80で熊商、熊農、第二について県立では3番目に高く郡部の高校では抜群のトップである。ちなみにこのときの郡部で次に高い競争率を示したのは玉名工業の1.44倍となっている。また、平成15年度においても北稜の1.68に次いで、1.59と郡部では第

2位である。郡部の高校が軒並み定員割れを生じている中で総合学科としての翔陽高校の存在は大きい。入試改革が行われ平成17年度から前後期の入試となった、推薦制の場合、中学校が推薦条件の範囲内で受験者をコントロールするので極端に倍率が高くなることはないが、前期入試になって誰でも受験が可能になり希望者が殺到する高校が現れるなど前期入試の高校別選抜倍率の差が激しくなった。しかし、募集定員が1学科で140名と絶対数の多さから見ると希望者が2.34倍（平成20年度）と集中していることは特筆すべきことである。

表6 受験倍率の推移

区分	平成10年度		平成15年度		平成20年度	
	推薦	一般	推薦	一般	前期	後期
競争倍率	2.07	1.85	1.71	1.59	2.34	1.28
募集定員	84	196	84	196	140	140

（平成17年度から入試制度の変更により前後期制となって募集定員が変更されている）

## 5 学校評価アンケート

学校評価アンケートによると、生徒の評価では全体的にプラス評価が多いのが目立ち、選択科目については進路希望に応じており総合学科の高校に来てよかったと高い満足度を示している。しかし、自己の学習に対する取り組みへの評価が低く、家庭学習の習慣ができていない。（表7、8） 保護者の評価では、学校経営、学力向上への取り組み、進路指導、生徒指導など全体的に満足度が高く評価も高い。唯一マイナスは家庭学習の習慣が見られないことである。

生徒保護者の両方にポイントの低かった「先生方は学習した内容が確実に身につくよう、分からないことや良くできなかった事柄について納得するまで指導してくれる」は、生徒の評価が2.3、「子どもは、分からない事や良くできなかったことについて、先生方は納得するまで指導してくれる」と言っている。」は、保護者の評価が2.5である。教職員のアンケート項目「生徒一人一人の理解度に合わせて教科指導や実習指導の工夫を行い、自分としては納得の行く教科指導や実技指導を積み重ねている」でも職員の評価も2.6と低い。

生徒の意識調査の結果では、選択科目が制限されていると感じているものは少なく科目選択システムには満足しているが、先生方は、学習した内容が確実に身につくよう、わからないことや良くできなかった事柄について納得するまで指導してくれないという不満を持っている。授業の展開については、先生が生徒の気持ちに充分応えていないことが伺える。

学力の向上を目指して、家庭学習アップ週間や宿題を出すなどさまざまな取り組みがなされているが、家庭学習習慣の確立までは至っていない。

表7 生徒アンケート（満足度を4点満点とした平均値 学校評価生徒アンケートから抜粋）

項 目	評 価	
	平成19年度	平成20年度
生徒の興味、関心、適性、進路に応じて選べる選択科目が多く、充実している。	3.11	3.0
科目選択は自分の将来に役に立っている。	3.06	——
総合学科の高校に来てよかった。	——	2.9
進路に関する情報は生徒に十分提供されている。	2.88	2.8
先生方は、学習した内容が確実に身につくよう、わからないことや良くできなかった事柄について納得するまで指導してくれる。	2.43	2.3

表8 保護者アンケート（満足度を4点満点とした平均値 学校評価保護者アンケートから抜粋）

項 目	評 価	
	平成19年度	平成20年度
本校は他校にない特徴があるので入学させてよかった。	3.30	3.2
子どもは学校に行くことが楽しいと感じている。	3.17	——
子どもは、わからないことや良くできなかったことについて、先生方は納得するまで指導してくれると言っている。	2.46	2.5
本校は一人一人の良さを伸ばし進路希望を達成させるため積極的に子どもの進路相談に対応し、的確なアドバイスを与えてくれる。	3.02	2.9
子どもが日常生活で困った時に、先生方は親身になって考えてくれる。	2.92	2.9

## 6 キャリア教育への取り組みと進路状況

望ましい職業観・勤労観の育成を目指して3年間を通したキャリア教育の充実に努めているが、1年次の「産業社会と人間」による進路学習やガイダンスから始まり、2年次「総合的な学習の時間」のインターンシップを中心とした事前事後指導、そして、3年次の「総合的な学習」では、選択科目によって学んだ学習の内容を更に深め、自ら課題を設定して解決に努める総合研究へと発展させている。

しかし、このようなキャリア教育の流れが確立したのは平成16年からで、それまでは2年次生の科目選択指導とインターンシップに関する指導はホームルーム時を中心にクラス別あるいは学年合同ホームルームなどの形で行われていた。（表9）

表9 キャリア教育の主担当科目

		1年次	2年次	3年次
平成15年度 まで	科目	産業社会と人間	LHR	課題研究
	教科(単位数)	産業(2)	特活(1)	専門(2)
	内容	科目ガイダンス 体験学習 講話など	インターンシップ の前後指導 科目選択指導	課題選択の探求、結 果の発表など
平成16年度 から	科目	産業社会と人間	総合的な学習	総合的な学習
	教科・単位	産業(2)	総合(2)	総合(2)
	内容	同上	インターンシップ 前後指導 インターンシップ 科目選択指導など	同上  ※別途デュアルシ ステムの導入

卒業後の進路状況を見ると、平成10年3月の卒業生は総合学科になる以前の専門高校最後の卒業生の状況である。進学対就職だけで比較すると、総合学科になってから進学の割合が高くなっている、しかし最近の県平均と比べると進学の割合は低い。(表10) 翔陽高校は就職状況が良いという地域の意識が強いのと、近くに進学を目指す普通高校があることから入学当初から就職を希望する生徒が多い結果だと思われる。

表10 進路状況

(%)

	進 学		就 職	その他
	大学・短大等	専門学校等		
平成10年3月	26.5		72.4	1.0
平成15年3月	12.9	37.0	40.2	3.2
平成20年3月	14.8	26.1	56.4	2.7
平成20年3月 (県平均)	41.7	25.2	30.2	2.9

県平均は熊本統計年鑑(平成19年度)から

「産業社会と人間」は1学年主任を中心とした担任団が担当し、企業・上級学校見学、講演、体験学習、班別学習、討論、系列のガイダンスなどの授業形態でキャリア教育の基礎を担っている。

インターンシップは2年生全員を対象としたもので平成12年度にはじめた。毎年7月のはじめの5日間、大津町の企業を中心に実施している。第1次産業から小売店や、官庁、学校や医療関係など幅広い分野で実施し、進学希望者は大学や専門学校で上級学校体験を行っている。

デュアルシステムやインターンシップは総合学科だけが実施していることではないが、総合学科ではキャリア教育の重要な柱として早くから採り入れ実施している。その指導体制も整い相当



の成果を得ている。新しい高等学校学習指導要領では、職業教育に関して配慮する事項の中に、「学校においては、キャリア教育を推進するために、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、地域や産業界等との連携を図り、産業現場等における長期間の実習を取り入れるなどの就業体験の機会を積極的に設けるとともに、地域や産業界等の人々の協力を積極的に得るよう配慮するものとする<sup>5)</sup>。」という文言が追加された。現行の学習指導要領が実施されるに当たり、総合学科の学科としての原則履修3科目のうち、「情報に関する科目」・「課題研究」が科目「情報」・「総合的な学習」として全ての生徒への必修科目となったと同様にその成果が認められたことは確かである。総合学科は新学習指導要領の基準を先取りして実施しているといってよい。翔陽高校においては、平成19年・20年度に「実践的産業人育成推進事業」の県の指定を受けキャリア教育の充実に取り組んだ。この事業においては校外実習（デュアルシステム）、校内実習、外部講師による講義、全校的な講演会、工場見学などさまざまな取り組みを実施した。

## 7 総合学科の課題とこれから

従来の学科制のもとで、ある学科の生徒は、実習の休み時間に校内の売店に買い物に行くとき、実習服から制服に着替えていた、理由は「実習服姿が恥ずかしい」と言うことである。偏差値を基にした入試制度で生じた学科間の格差が劣等感となり歪んだ学校生活を送っていた。総合学科になって、休み時間に着替えて売店に行くことはなくなった。実習服のまま堂々と買い物するようになった。総合学科では学習分野が何であろうとも、自分の意思で選択した結果には自負があり、その学問を学ぶための服装に誇りを持っており恥ずかしさはない。

また、別の例では、対外的な生徒研究発表会で、先に実施された専門分野の生徒が、大会の雰囲気や、発表のための技術的なノウハウを次に開催される専門の生徒たちに伝え合っていたことである。この結果この年の生徒研究発表大会では、商業、家庭、工業、農業といくつもの分野で優勝することができた。専門学科では学科への帰属感は強くなりクラスの団結は固くなるが校内の学科間では競争心や対立が存在した。このため他の学科の研究発表会などに興味や関心を示すことなどなかった。総合学科では生徒はホームルームという生活集団と授業を受ける学習集団を移動しながら学校生活を送っている。一人一人がそれぞれの価値観によって科目を選択し学習内容を決め、それぞれの違った夢に向かって進んでいることが、互いの人格を認め合うことになってホームルームでの人間関係に信頼感が増し、自分の得意分野について情報交換がスムーズにできるようになった。

総合学科の理念は、個性化した生徒一人一人の教育ニーズに応え、学習意欲を高め進路の実現を目指すことである。翔陽高校では幅広い学習分野を確保し、自由に科目選択ができるようにするという点では、これまでの取り組みで十分な成果を上げている。しかし、科目選択制はシラバスを通して先生と生徒が学習内容の契約を結ぶことであり、先生はシラバスに沿った学習を進める義務がある。授業では学習内容を理解し、目標に到達するための努力を生徒に求めることが必要である。科目に応じた高いハードルを設定することが科目選択結果への満足度を高め、学習意欲の向上に繋がると思われる。この部分の契約が履行されているか否かが課題の一つである。多くの総合学科高校では科目選択に条件をつけ、自由な科目選択ができなくなっている傾向がある、翔陽高校の場合、開設科目も多く、科目選択のガイダンスも充分に行われ体系的な学習がで

きるような指導がなされているために、生徒は科目選択の結果には満足している。(表7) しかし、科目選択はあくまでも進路希望の実現という真の成果を得るためのスタートであり、ゴールではない学習内容の充実に努めることがより大切である。

学習領域を確保し選択授業を行うためにはある程度の規模が求められるため、総合学科は施設設備の充実等でコストが高くつくという印象が強く、財政的に負担が増えるという心配が総合学科設置への妨げになっている。少人数の授業を展開するためには多くの教室や先生が必要になる。現在の高校入試志願者数の傾向を見ると、熊本市内の高校に希望が集中し、郡部の高校は軒並み定員割れか定員すれすれである。熊本市の普通科公立高校に入学希望が集中していることは、郡部では進学希望がかなわないということの現れである。反面、就職を希望しながら、地域に1校しかない普通高校に進学している生徒は多い。進学のためのカリキュラムの下で進学を目指す他の生徒と一緒に学習できるはずもない。生徒数激減の結果、1学年6クラス、7クラス規模だった高校が現在1学年2～3クラス程度となって存在している。このような学校では空き教室も多い。上級学校進学を目指す者、部活動に集中したい者、とりあえずは高校卒業を目指す者など、さまざまな生徒のニーズに個別に対応できるのが総合学科である。人口が集中し複数の高校が設置できるような地域には独立した普通高校や専門高校があつてそれぞれ特徴を発揮できるが、生徒数が少ない地方にあつては、個々のニーズに応じたきめ細かな指導ができる総合学科高校が効果的である。専門分野が異なり、学習に対する意欲や能力の程度も違うさまざまな人間が生活集団を作り、それぞれが互いを認め合い、志を同じくするものが集まり切磋琢磨するような学習環境作り、それが実現できるのが総合学科である。

総合学科の長所を生かすためには、並々ならぬ職員の努力が欠かせない。科目選択のためのガイダンスはもちろんであるが、3年間を通したきめ細かなキャリア教育がなされなければならない。総合学科の課題は、その設立趣旨を生かした展開のために職員に負担がかかるということである。生徒の科目選択の結果に満足感を与えること、選択した科目の授業内容に満足感を与えることが大切である。全国の総合学科高校のカリキュラムを見ると総合学科の趣旨に合った選択制が行われているのだろうかと思いたくなるようなところも少なくない。あくまでも総合学科の生命線たる科目選択制の運用に手抜きは許されない。「総合学科の高校は先生に厳しい学校であり、先生が育つ学校である。」といわれる所以である。

全国総合学科校長協会は総合学科の課題として「総合学科の今後のあり方」を8項目挙げている<sup>6</sup>。

- ① 多様で魅力ある科目開設の推進
- ② 生徒一人一人に対応した進路学習やキャリア・カウンセリングの充実
- ③ きめ細かい生徒指導や学校への適応指導の充実
- ④ 入学者選抜の工夫改善
- ⑤ 大学における入学者選抜の改善
- ⑥ 地域や産業界とのパートナーシップの確立
- ⑦ 総合学科に関する理解促進
- ⑧ 国や設置者による支援

以上の各項目と翔陽高校の取り組みを検討したい。①については、設置科目数及び開講科目・講座展開数で表されたとおり、充分の対応がなされている。②、③についても「産業社会と人間」をはじめとして学年主任を中心に学年団としてチームを組んで十分な指導がなされている。④の

入試の工夫では、前期試験においてディベートを採り入れるなど特徴的な生徒の確保に努めている。⑥の地域との連携は、インターンシップやデュアルシステムの実施、さらには教育懇話会制度を実施して地域の企業や行政などさまざまな立場からメンバーを集め学校経営に対する理解を深めており、情報の交換が十分に実施されているとよい。⑦の総合学科に関する理解は地元には行き届いているが、県下全体に理解されているかははなはだ疑問である。県下に1校設置されたままで、通学できる範囲も限られているため進学先として選択の範囲外の地域への理解は進んでいない。⑧の設置者の熊本県教育委員会は生徒管理システムの充実、あるいは多くの選択科目実施のための人員の配置などさまざまに配慮しているが、複数校の設置という県民に身近な形での浸透が図られていない。⑤の大学入試は年々改善が進み、総合学科の生徒が入学しやすくなってきている。これらの項目を見る限りにおいては翔陽高校の総合学科は学校で対応できることを全てクリアしており成果を上げていると言ってよい。

## 8 終わりに

熊本県下の公立高校の入学志願率を見ると、平成20年度後期選抜の場合翔陽高校の倍率は1.28倍である。郡部の高校において志願者数が定員を割り込む中で中学生に対する人気は高い。

翔陽高校の立地する大津町は、熊本市から東へ約20km、熊本市と阿蘇山とのほぼ中間に位置し、近隣に熊本空港、九州自動車道の熊本インター、JR豊肥本線、国道57号線が走る。この立地条件を受けて自動車関係工場を中心に数多くの企業が進出している。町全体が大変活発で、町民一人当たりの所得も高く町は国からの地方税交付金を受けていない県下唯一の行政団体である。

生徒にとっては交通の便が良い、大変通学しやすいなど利便性の良さに加え、活力ある地域からの教育活動の支援、学校の努力が相まって、総合学科としてこれまでの実績が評価されていることは間違いない。翔陽高校の自己評価において生徒の学校に対する満足度は高い。これが、いわゆるクチコミとなって中学校の先輩から後輩へと受け継がれ高い志願率を維持していると考えられる。

筑波大学永岡順名誉教授は「新しい教育への的確な方向付け」と題したコラムの中で、『今要望されている教育改革が成功するかどうか、その成否は各学校の子供一人一人に対する普段の教育指導や学習活動が、どこまで子供にとって、「より望ましいもの」として具体化され、実現されていくかに懸かっている。』<sup>7)</sup>といている。総合学科が誕生して15年、普通科や専門学科に選択制や単位制が導入されより柔軟な教育課程の編成や展開がなされるようになって、総合学科の独自性が薄れ、定員割れに悩む学校も現れている。職員全員が常に設立初期の理念を意識し、モチベーションを維持することが必要である。

## 参考資料

熊本日日新聞平成16年2月24日県内公立高校志願者数

同 平成20年2月23日県公立高校入試「後期選抜」志願者数

熊本県立大津産業高等学校平成6年度学校経営案

熊本県立翔陽高等学校平成10年度学校経営案

同 平成15年度学校経営案

同 平成20年度学校経営案

同 総合学科実践発表会資料（平成18年12月15日）

同 実践的産業人育成推進事業研究報告会資料（平成21年2月23日）

同 教育懇話会資料（平成20年度）

月刊高校教育2008年11月増刊「高校改革のいま」学事出版

月刊高校教育2009年6月号

## 脚 注

1：高等学校教育の改革に関する推進状況について（平成20年10月の文部科学省）

2：総合学科関係資料（文部科学省初等中等教育局職業教育課（平成12年3月））

3：高等学校学習指導要領総則（第1章第4款の6）

4：夏期休業中の10日間集中のデュアルシステムによる体験は、学校外学習に係る増加単位として2単位を認定（実践的産業人育成推進事業研究報告会資料（平成21年2月23日））

5：高等学校学習指導要領総則（第1章第5款4の（3））

6：全国総合学科校長協会ホームページ（<http://sogogakka.jp>）

7：内外教育（時事通信（2009年04月07日））